

2017年5月14日 召天者記念礼拝メッセージ

聖書：ヨハネの福音書 11章 30～46節

説教：さあ、外へ出て来なさい

はじめに

今日は、先に亡くなられた方々を思い起こす召天者記念礼拝となっています。人生の中で悲しいことは沢山ありますが、そのなかでも愛する者を失うことほどつらいことはおそくないでしょう。高齢となった親を見送ったというのなら、まだ心に納めることはできるかも知れません。でも、そうでない場合もあります。まだ若いのに、愛する配偶者や子ども、あるいは親しい友人を病気や事故で亡くし、墓に葬らなければならぬとき、心の痛みは生涯続いていくでしょう。

私の叔父は、二十代の長男を海の事故で亡くしました。その叔父も数年前にがんを患って亡くなりました。まだ元気でいたとき、私たちが尋ねて行くといつも喜んで迎えてくれました。でも、ずっと心の内に息子を亡くした悲しみを抱えて苦しんでいました。もしかして私を亡くした息子の代わりのように思っていたのかもしれませんが。

今日開いている聖書の箇所には、ラザロという兄弟を亡くして悲しむマルタとマリヤの二人の姉妹が出て来ます。聖書において、いのちとは何であり、死ぬとは何であるのか。神はこのことをどのように取り扱っておられるのか。ともに見て参ります。

1 主よ。もしここにいてくださったなら、死ななかつたのに。

イエスとこの三人は以前から親しい間柄だったようです。そんななかあるときラザロは重い病気にかかってしまいます。姉妹たち

はイエスにすぐに来て下さるよう使いを出しました。ところがイエスの到着は遅れ、着いたときにはすでにラザロは亡くなり、墓に納められて四日も経っていました。マルタが村の入り口までイエスを迎えに出て来たときに、マルタの口から出たことばはこうでした。21節。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

このあとイエスとマルタのいろいろやりとりがあり、マルタは家に戻ります。マリヤは家では泣きはらしておりましたが、イエスが会いたがっているから行きなさいと姉に言われ、マリヤはイエスの所に向かいました。そこでマリヤもこう言いました。32節。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟はしななかつたでしょうに。」

マルタとマリヤはイエスに会うなり、まったく同じことばを語りました。イエスが遠くにいてそれで間に合わなかつたというのなら、納得もしたでしょう。姉妹たちが使いを出してイエスを呼びに行かせたとき、ベタニヤのすぐ近くにいて、行こうと思えばすぐにでも駆けつけることができました。ところが、なぜかイエスはすぐに出かけずその場に二日間とどまりました。やっと腰を上げたと思ったら、まっすぐに向かわずユダヤ地方に足を伸ばし、それからベタニヤに向かつたのです。

その間、マルタとマリヤはやきもぎしています。イエスさえ来てくれたならラザロは助かるとの望みを持ちながらずっと首を長く

してイエスを待っていました。でもラザロは死んでしまいます。何か裏切られたような思いがしたでしょう。

皆さんも同じような経験をされたことがあるかも知れません。家族が病気だとわかったとき、いのちが助かるようにと誰もが祈るでしょう。クリスチャンであれば聖書の神に祈ります。信仰がない人でもそうでしょう。私の妻は、出産のときに大出血をして死にかけたことがありました。そのとき私はまだ信仰をもっていませんでしたが、それでも何かに向かって祈らざるを得ない気持ちになりました。幸いにして私の場合妻は助かりました。でも祈ったけれど、祈りがかなえられなかったということも起きます。マルタとマリヤがそうでした。神はいったい何を考えておられるのでしょうか。

2 イエスは涙を流された

1) 行いが悪いので祈りが聞かれないのか？

祈りがかなえられないように感じられるとき、私たちはいろいろなことを考えます。仏教を信じる方なら、お仏壇に手を合わせなかったせいかな。お墓参りをきちんとしなかったからか。そういうことを思い起こすかも知れません。クリスチャンであれば、教会の礼拝に出なかったからだろうか。まじめに祈らなかったからだろうか。あるいは、心の中で悪いことを考えていたせいだろうかと思うかもしれません。

ではマルタとマリヤはどうであったのか。信仰者として何か問題があったのでしょうか。それで罰としてイエスはわざと遅れていった。間に合わないようにした？そんなことはありません。

2) ともに悲しむ神

33 節から 35 節を読みます。「そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。『彼をどこに置きましたか。』彼らやイエスに言った。『主よ。来てご覧ください。』イエスは涙を流された。」

人が死んだことをなんとも思わない神ではありません。私たちが家族を亡くして泣いているとき、神もそばに来られていっしょに泣いてくださいます。そこにはえこひいきはありません。人が死ぬとき、神も心の動揺を感じると書かれています。神は何でもできて、何でも知っておられる。はるかに超越していて、動揺することなどない、いつも沈着冷静である方、そう思っていました。それが、心の動揺を感じたとか書かれています。

3 主は何をして下さったのか

1) 「わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します」

これを聞いて少し安心します。でもそれだけでは納得できない。というのは、神はそばでいっしょに悲しんで下さるだけで、それ以上は何もできない方なのならどうでしょう。信じる意味があるのでしょうか。もし何もできないのなら、信じる意味はありません。

イエスがこのように語っている所に目を留めます。42 節。「わたしは、あなたがたいつともわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申し上げたのです。」

一度読んだだけでは何を言いたいのかわ

かりにくい文章です。訳が悪いのではなく、もとの文を見てもわかりにくい。「こう申し上げたのです」とあるけれど、何を申し上げたのか。どうもその直前にある「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します」を指しているようです。イエスの力でしたことではない。イエスが父にお願いした結果、父が願いを聞いてくださった。そんな流れであることはわかります。

2) 「石を取りのけなさい」「イエスは目を上げて」

でも、いったいどんな願いを聞いてくださったのか、次にそこがわからない。というのは、41 節の時点では、まだなにも大きな出来事が起きていないからです。何も起きてもいないのに、既に願いが聞かれていると言っているように聞こえます。ある方は言うかもしれない。もうこの時点で、ラザロは墓の中でよみがえっていて、それで「私の願いを聞いてくださった」と言っているのではないか。そうではないと思います。ラザロがよみがえるのは、この後イエスが大声で叫ばれたときです。では、なんのことか。

一つのことばに着目します。39 節の「その石を取りのけなさい。」41 節の「そこで、かれらは石を取りのけた。」同じ「取りのける」が使われています。そしてもう一つ、すぐに続く「イエスは目を上げて」、実は「取りのける」と同じことばが使われています。不思議です。イエスは人々に向かって「墓の穴をふさいでいる石を取りのけなさい」と命令した結果、その石は取りのけられました。人が動かしたものですから、そんなことは奇蹟でも何でもありません。別に父なる神にお願いすることでもないはず。ここだけ見ればそ

の通りです。

3) さあ、外に出て来なさい

でも、やがてこの方が十字架で殺され、墓に葬られることを私たちは知っています。そのことと結びつけて考えてみたらどうでしょうか。

十字架でイエスが死なれたのは金曜日の夕方です。日没が迫っておりましたから、大急ぎで処置をして墓に葬り、墓の穴は石でふさがれます。だれかが盗んで行かないようにとローマ兵が墓の前に立つほど厳重な警戒ぶりです。そして日曜日の朝になります。その日のことがヨハネ 20 章 1 節に書かれています。「さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけられてあるのを見た。」

ここに先ほどと同じことばが出て来ます「墓から石が取りのけられていた。」単なる偶然でしょうか。だれが石を動かしたのでしょうか。イエス自身ですか。いいえ。そうではありません。父なる神が動かしたのです。イエスはラザロが葬られた墓に向かって「ラザロよ。出て来なさい」と叫びました。そうしたらラザロがよみがえりました。

では、墓の中に横たえられていたイエスに向かって、「イエスよ。外に出て来なさい」と叫んだのは誰か。父なる神です。なぜ父なる神がそうしたのでしょうか。イエスが40 節でこう語っていたことを思いだしてください。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、と私は言ったではありませんか。」

これは、イエスがマルタに語ったことばです。でもイエスは他の人にだけに向かって終

わる方ではありません。人に語ったことは、ご自分にも跳ね返っていきます。ご自分のこととしても語っています。そのことがどこでわかるか。日曜日の朝です。イエスが葬られた墓の石が取りのけられ、イエスがよみがえられました。これはすべて主が、父なる神に願っていたことです。必ずそうなると信じ続けていました。主がよみがえられたことによって、確かに、私たちは墓の前で神の栄光を見ることになりました。

イエスは、十字架で苦しみながら死んでいくときに、なお父なる神に願っていたこととなります。十字架は死で終わるのではない。必ず父は死んだ者をよみがえらせてくださる。そう信じ続けました。

「信じる」と口で言うのは簡単です。自分が死ぬ間際になっても信じられるのか。愛する者が死にかけているときでさえ信じられるのか。信仰なんかどこかに消えてなくなるかもしれません。でも、この方はご自分のからだをもって、本当にそうなることを証明してくださいました。マルタもマリヤも頭ではわかっていたのです。でもラザロが死んでしまうと、信じることができなかった。私たちは、その程度のものなのです。それで、イエスは二人の姉妹を駄目な信仰者だと叱りましたか。いいえ。皆の前でラザロを呼び戻しました。墓の中に入るのはラザロではないと言っているのです。墓の中に入るのはイエスご自身だけで十分である。信仰などどこかに消えてなくなりそうな私たちに対しても、主は「大丈夫。信じていなさい」と励ましてくださいます。

私たちは愛する者たちを墓に納めてきました。墓の前で何度も泣いてきました。墓は恐ろしくて近づきたくない場所と考えてい

ます。しかし、主は墓こそ神の栄光が現される場所に変えてくださいました。

先に天に召された人たちと再会できる、そのことをともに信じ続けたいと願います。